

成田 昇明（なりた・のぼる）

1、プロフィール

歌人。櫛引唯治、川口敏蔵らと潮汐会青森支部を結成、23年2月「青森潮汐」を創刊。展望台歌会をはじめ後輩の指導にあたった。没後、一周忌に仲間が遺歌集を発行した。

<生没>

1931(昭和6)年7月1日～1973(昭和48)年11月3日

<代表作>

歌集『成田昇明歌集』

<青森との関わり>

東津軽郡平舘村に生れる。24年3月県立青森中学校を卒業。28年結核のため入院、転院を経て長い療養生活を送る。

2、作家解説

成田昇明は、昭和6年7月1日東津軽郡平舘村磯野に生れた。父は当時、平舘小学校に勤務していたが、父の転任にともなって19年4月、青森県立青森中学校に入学、戦後は焼野原の青森市において櫛引唯治、川口敏蔵らを中心に潮汐会青森支部が結成されて昇明も参加。23年2月「青森潮汐」を創刊した。24年3月、青森中学校を卒業。卒業と同時に新城村の農業会に臨時就職、のちに県農地課に勤務。28年、県国民健康保険連合会事務局に勤務していた彼は、結核のため東青病院に入院。さらに県立病院八重田分院に転院、療養生活に入った。ここの短歌グループに須々田一朗、福島常作が属し、杉山灯影、櫛引、川口らの潮汐会員が月例会に出席慰問していたのが動機で、西平内の国立療養所、久栗坂の臨浦園など、療養者の短歌が誌上に目立つようになった。

「この恋の終りしときは吾が命断たんと思ひ日々を生きつぐ」32年に仁木陽子と結婚。

「夜おそく短歌(うた)作らむとする吾に妻はあつきあつき茶を飲ましむる」

展望台歌会を倉内信也、工藤博、今よしえ、風張景一、花田章司らとはじめていた昇明は、34年9月、母りゑ死去。35年6月、長男知巳誕生。38年12月、父正巳逝去。39年新城の住家を整理、造道沢田へ転住。41年6月、「憂ひ」30首が昭和40年度青森県歌壇新人賞を受賞。青森市柳町コロンバンでの祝賀会には病臥中で出席できず、妻の陽子が出席するなど、多忙な時期がつづいたが、

「心いたく安らぎて妻子と歩みゆく清き朝日さす一月の園」(48年)と詠った年の10月、病状悪化し、弘前健生病院に入院、48年11月3日同院で永眠。行年42歳。1周忌にあたる文化の日に行われた潮汐会青森支部歌会で、遺歌集刊行が決まり、仲間の友情と協力によって、『成田昇明歌集』が発刊された。

3、資料紹介

○『成田昇明歌集』

図書

1973(昭和48)年11月3日

130mm×115mm

第1歌集。昭和28年から48年までの短歌292首を収める。42歳の短い生涯を終えた昇明のために1周忌にあたる文化の日、潮汐会青森支部歌会で歌集刊行が決まり、「短歌という無償の文学行為に一生を懸けた成田君」(川口敏蔵)のために遺歌集を発行し、霊前に捧げた。